

審査委員長講評

平成26年度の千葉市総合展覧会科学部門は、4年振りに4日間の会期で開催されました。参観者は約6,000人を数え、盛況を博しました。出品作品数は例年どおり1,000点を超え、小中学生の研究の成果が披露されました。昨年に引き続き、1F・きぼーる広場にて、小学生の作品の展示と自分の作品の解説を行い、より距離が近く、わかりやすい展覧会となるよう工夫をしています。

各学年の作品を審査すると、児童生徒の学年による発達段階の違いから、特徴ある作品が生み出されていました。それぞれの傾向を分析すると……

<小学生>

- 磁石、ゴム、電気、風、チョウ、アサガオなど身近な題材や自然現象をとらえ、日常生活の中から疑問を見つけ、時間をかけて追求している。
- 高学年になると実験の条件整備を行い、科学的な見方、考え方が加わり、表・グラフを使ってわかりやすく説明することができる。
- 工夫工作は、低学年では楽しく遊べるものが多い。高学年になると、生活に役立つ道具が主流となり、動作性の確認を十分に行っている。

<中学生>

- 身近な疑問や自身が興味を持ったことを題材にしている。小学校からの継続研究も多い。
- 予想を立てて実験を行ったり、自作の実験装置を工夫している場合もある。授業での経験を通して実験の進め方が身につけており、客観的なデータを豊富に集め、科学的な見方や考え方をまとめてまとめている。
- 工夫工作は、家庭にある用具に工夫を加え、生活に便利な道具や介護に関連した作品を作成している。また、実際に作動させたデータをまとめたレポートを付属させているものが増えつつある。

学習指導要領には理科の目標として、小学校では「自然に親しみ、見通しをもって観察、実験などを行い、問題解決の能力と……科学的な見方や考え方を養う」。中学校では「自然の事物・現象に進んでかかわり、目的意識をもって観察、実験などを行い、科学的に探求する能力の基礎と態度を育てる……」とあります。理科総合展に出品された自由研究の作品は、身近な自然から課題を見つけ、目的や見通しをもって実験を行い、科学的な見方や考え方を基にまとめてしており、学習指導要領の趣旨にまさに合致しています。また、理科研究相談会に参加した児童生徒の作品が選ばれており、相談会が有効に機能していることがわかり、たいへんうれしく感じました。

さらに、代表作品が千葉県科学作品展においても、千葉県知事賞、千葉県教育研究会理科教育部会長賞、千葉県発明協会会長賞等に輝き、多くの作品が優秀な成績を収めました。これは、千葉市の理科教育の水準の高さを示していると言っても過言ではありません。また、児童生徒並びに保護者の皆様のご努力、指導された先生方のご努力の成果でもあります。こうした成果を土台として、ますます千葉市の理科教育が充実していくことを願っています。

結びに、本科学論文集の作成に当たってご協力いただいた児童生徒並びに保護者の皆様、学級担任や理科担当の先生方に感謝申し上げます。また、理科主任会及び千葉市教育委員会指導課の先生方のご努力に敬意を表します。

千葉市総合展覧会科学部門 審査委員長
千葉市立蘇我中学校長 齊藤啓一